

令和3年3月31日

学校法人敬心学園 日本福祉教育専門学校  
令和2年度 第2回学校関係者評価委員会 議事録

日時：令和3年3月15日（月）14：27～16：10

場所：日本福祉教育専門学校 本校舎3階 131 教室

出席者：（委員）

松山 慎司（社会福祉法人 西東京市社会福祉協議会）

肥後 義道（府中市役所）

大竹 宏和（社会福祉法人 豊島区民社会福祉協議会）

小内 仁子（医療法人社団イーボイス 新宿ボイスクリニック）

志村 敬親（中野区精神障害者地域生活支援センターせせらぎ）

（学校）

大谷 修（日本福祉教育専門学校 校長）

石川 秀志（日本福祉教育専門学校 教務部長）

東 康祐（日本福祉教育専門学校 学生副部長）

中嶋 裕之（日本福祉教育専門学校 事務次長）

萬崎 保志（日本福祉教育専門学校 教務担当次長）

後藤 健（日本福祉教育専門学校 学務課・書記）

（敬称略）

**【議題】**

**1. 大谷校長挨拶**

一人ひとりの学生に寄り添った「ティーラーメイド教育」を標榜し、学生に専門職のやりがいを伝え学生の集まる学校を目指している。それにより経営の安定に繋がりたいと考えているが、必ずしも思い通りには進まないため、学校関係者からの意見を頂戴し、学校の発展につなげたいと考えている。

特に中退防止策については、学生との個別面談の機会を設けることが重要だと教員も認識している。

**2. 令和3年度の卒業生連携検討内容について（石川・中嶋）**

下記2点について説明がなされた。（詳細は別添資料参照）

- 1.) 精神保健福祉士一般養成通信課程による「オンラインによる交流会」
- 2.) 介護福祉学科による留学生の卒業生を対象とした卒業教育「異文化間交流(ダイバーシティ)研修プログラム」

以下、意見交換。

### 1.) について

- ・この取り組みを考えた背景について。
  - 通信教育部の修了生は1万人を超えている。この人材を活かしたいと常々考えていたが、修了生全体という規模感では大きすぎるため、規模を縮小して、できる範囲から取り掛かり、広げていく予定。これは、精神保健福祉士一般養成通信課程だけでなく社会福祉士一般養成通信課程でも同じことが言えると考えている。
  - 働きながら学ぶ学生が多いので、開催する時間帯を工夫する。
  - 初めは完全自主参加型ではなく、既に関係性のある学生に協力依頼した形での実施を予定している。(石川)
  
- ・年何回くらい実施することを想定しているか。
  - 年4回くらいを想定。
  - 多くの学生が実習に入る前のタイミングで実施し、実習に関する施設側と学生の希望のすり合わせを行うような内容にしたい。
  - 年齢層は、平均年齢45歳前後が中心で、かつ50代以上も多いため、第2のキャリア形成をするにあたり、どういう進路があるのか、また施設側から期待されることを高年齢の学生に示し、学生側の展望と結び付けることが狙い。
  - 高齢層・主婦・キャリアチェンジ志望者の3つの層に分けて実施したい。(石川)
  
- ・今年度の実習はどのように対応したのか。
  - 今年度は学内実習がメインだった。(中嶋)
  - 学内実習により今年度は年齢層に関係なく実習ができたが、とりわけ医療機関からの実習生への要望(=即戦力の確保)と高齢学生の資格取得の目的が違うため、そのすり合わせが必要。(石川)
  
- ・高齢の学生は現場で働いている方が多いのか。
  - 働いている方と30年企業で働いた後、定年間近で地域に貢献したいという方までおり、半々くらい。施設によっては高齢で資格を取ってからのビジョンに懐疑的なケースも見られる。(石川)

・高齢の学生の就職先はどのようなところが多いのか。（委員）

→精神保健福祉士養成(学)科と社会福祉士養成(学)科それぞれの受け入れ先によって認識の違いがある。

社会福祉士養成(学)科では地域に貢献したいという高齢学生に対しては、受け入れのプログラムがあるため就職につながるかどうかに関わらず効果があるケースが多いが、精神保健福祉士養成(学)科においては、即戦力が欲しい医療機関からすると、実習で高齢学生を受け入れづらく感じることも一定の理解はできる。

むしろ、精神保健福祉士として地域に貢献したいと考える高齢学生の資格取得の動機やきっかけを知ることができる交流会が実施できると良いのではと思う。（委員）

→精神保健福祉士養成(学)科は医療機関とのつながりが強いので、高齢学生の実習受け入れについていつも困ってしまう。（石川）

→社会福祉士養成学科にも高齢の学生がいるが、生活困窮者の支援に進む方が多い。精神保健福祉士養成(学)科の場合に限らず社会福祉士養成(学)科でも、高年齢の学生に関しては医療分野の進路にこだわりを持つと就職は厳しいと感じる。（東）

→詳しく話を聞くと、精神保健福祉士ではなくカウンセラーをやりたいと思っている学生もいる。そうした学生に対しても、会話はせずとも交流会に参加して、精神保健福祉士がどういう仕事をするのかを知ってもらう機会にもしたい（石川）

→高齢の学生は社会人経験を積んでいて、コミュニケーション能力に長けているというケースもあり、生活困窮者支援や地域活動支援センターでは受け入れに前向きな施設もある。高齢学生の受け入れに関しては、施設の方針によるところもあると思う。（委員）

→医療機関はやはり新卒を欲しがる傾向にある。組織の中で育てていくという考えが根強いと思う。（委員）

・地域の施設がオンライン交流会に参加するメリットは何か？（委員）

→高齢学生が精神保健福祉士一般養成通信課程の学びを踏まえ、どう現場で実践的に活かすのかについてはっきりしていない事が多いため、現場の施設が求める働きを紹介できる機会にしたい。学生としては自分の活かし方を見つけられる場にしたい。（石川）

→現状は、合同面接会ではなくあくまでも交流の場として考えている。ただ、一昔前は現場で働く学生が多かったが、現在は高齢者からフリーター、当事者まで幅広い層が学んでいる。通信教育部でも通学部と同じように、精神保健福祉士として働くことについて知ってもらい、ゆくゆくは就職先とのマッチングを働きかける場にできたらと考えている。(石川)

→法改正に伴い、地活や作業所にピアスタッフ(当事者の経験者)を置くと加算がつく。今後はピアスタッフの採用義務化が進むとも考えられる。当事者経験者で働ける方のマッチングは大きな課題になるのではと感じている。(委員)

→学生の高齢層の増加、及び当事者経験者の増加は他学科でも同じ傾向にある。教員もこの変化に対応するのに苦労している印象。(委員)

→学ぶ意欲の高い学生と現場で働くOBとをオンライン交流会で結ぶことは良いと思う。(委員)

## 2.) について

・小さな施設の中には自前で人材育成を行うことが難しいところもある。人材育成を外部化していくという面で考えると魅力的に感じる。職業団体も年数を経っていくと専門職の育成という機能が低下していく傾向にあるので、教育機関が卒後の人材育成にも着手することは意義深い取り組みだと思う。(委員)

・コロナ禍の影響で特例貸付に関する外国人の相談が増えている。外国人の相談援助を外国人が対応できると言語の壁がなくなるため、将来的に、介護の経験を経て相談援助の道に進む外国人卒業生が出てきても面白いと感じる。特例貸付に限定すれば、社会福祉協議会によっては既に外国人を採用しているケースもある。(委員)

## **3. 令和2年度中退者並びに令和3年度中退防止策について(萬崎)**

### 1.) 令和2年度の中退者状況と退学理由の傾向

- ・学科によってバラつきがある。
- ・介護福祉学科の退学者は留学生が占める割合が多い。  
留学生特有の事由として学校が対処しづらい要因もある(ビザの更新不可など)。
- ・精神保健福祉士養成学科は体調不良や精神疾患を抱えていたケースが多い傾向にある。

- ・感染予防を重視し、唯一オンライン授業を通年実施した学科である言語聴覚療法学科は、昨年比での増加率が他学科よりも高くなる見込み。

退学理由の中でも、「学費の負担」や「勉強についていけない」ケースは少なく、「進路変更」や「音信不通」、「モチベーションの低下」というケースに着目している。

→中退にも防止できるものとできないものがある。

## 2.) 現状の課題

- ・推移の分析に必要な退学理由が非定型のため、分析が厳密にできず、真因を探りきれていない。

## 3.) 次年度の中退抑止策

- ・懸念学生の情報集約と共有方法の改善。（スプレッドシートを用いる等）
- ・全ての学生に入学して間もない時期に面談を行う。
- ・3日連続で欠席した学生に対しては電話連絡による状況確認を行う。

## 4.) 直近2年の状況

- ・退学理由のうち、「体調不良」が増加し、「進路変更」が減少。傾向を今後も追っていく。

以下、意見交換。

### 全体について

- ・中退を防止するにも、対策としてできることとできないことを分けていることはわかりやすく良い。（委員）
- ・進路変更が減ったことは、福祉分野はコロナの影響を受けない分野なのかもしれないと感じた。（委員）
- ・「進路変更」について詳しく知りたい。（委員）
  - 全く同じ疑問を学校側も抱いている状態。学校を辞める理由として表面的に取り繕った理由であることもあり、真因を突き止めていくことが課題。（萬崎）
  - 学校を続けるよりも、もっと良いことがあったため中退を選んだと考えられる。今年はコロナもあり下手に動かない方がいいという心理が働き、昨年よりも減少したのではないかと。（委員）

### 言語聴覚療法学科について

- ・オンライン授業主体の運営にしたことは一因だと感じる。例年、クラスメイトも大変そうにしていることを感じながら、支え合っていくことでカリキュラムをこなすことができていた側面があったため、オンライン化によりクラスメイトとのコミュニケーションが図れないことは中退要因になり得る。（委員）
- ・現場実習を経験していない学生が現場に就職してくることは医療現場の目線では不安。現場に出るとなかなかまとまって勉強する時間が取れないことを考えると、通常授業とオンライン授業の卒業生とで、学びの格差が広がる可能性があると感じる。（委員）
- ・コロナへの感染が怖いという理由でオンライン授業を希望している学生は、卒業後、感染者も入り混じっている医療現場に就職することを考えると、職業理解の時点で齟齬が生じているとも感じる。資格取得や知識を増やしたいという理由で入学している学生と、臨床家になりたいというマインドで入学している学生とで、学びに対しての温度差があると思う。（委員）

#### 4. その他

- ・施設や病院との連携強化という観点から、学校PRとして学校新聞を配布してみてもどうか。
- ・実習先に向けてチラシのようなものを郵送してみてもどうか。
- ・入学時の面談で気になった学生が、その後退学・卒業したかの経緯も知ることで、より分析が深まると思う。
- ・最初からオンライン授業であると、途中からオンライン授業に変わることに比べ、学生のモチベーションに影響したと思う。
- ・学生の変化に気づくことができなかったことは学校だけの問題ではなく、社会の中で格差が生まれてしまう問題とも捉えることができるため、この問題に関する情報発信の術について検討したい。
- ・学生は孤独になりやすいため、小さいグループを意図的に作り、何気ない会話からコミュニケーションを発生させ、それが学生のモチベーションのアップに繋がったという事例が参考になると思う。

以上

(文責：日本福祉教育専門学校 後藤 健)

(別添資料)

令和3年3月15日

日本福祉教育専門学校  
学校関係者評価委員会

### 令和3年度 卒業生連携の検討状況

#### ① 通信教育部・精神保健福祉士養成課程

・現状の課題

学校課題：

1. 志望学生の変化（高年齢者、当事者の増加）
2. 実習協力施設の確保に苦戦（特に医療系）
3. 定員確保に苦戦

受入れ施設の課題：

1. 実習に協力しても採用できない
2. 年齢の高い学生の採用には後ろ向き

#### 【令和3年度の取り組み計画】

「オンラインによる交流会」を検討

- 1) 現場（卒業生の就労施設）と学生の交流機会の創出（オンライン交流会）

教員がファシリテーターとなり、現場と学生の交流機会を設定

学生メリット：現場が見える（実習免除者も参加OK）

就職先が見える

意欲が保ちやすくなる

現場メリット：学生が見える（人材の質が見え、受入れ幅を検討しやすくなる）

学校の取り組みが見え、協力しやすくなる

- 参考) 学生同士の交流機会の創出（オンライン学生交流会）

学生メリット：同期の顔が見えることで学習意欲が向上する

質疑応答に即座に対応してもらえる

教員が見える事で教員への信頼性が向上する

学校メリット：学生が見えることで指導効率が向上する

(メモ欄)

(別添資料)

## ② 介護福祉学科

### 1. 介護福祉士養成のパイオニア校として

「介護福祉士として一緒に働きたいと思える専門職の養成」を目標に掲げ、学科教育・学生支援の再構築を行う。

※一緒に働きたいと思える専門職とは？

- ・礼儀を弁えた人材
- ・ルールが守れる人材

### 2. 卒業生との接点創り「卒後教育の導入」

#### 【令和3年度の取り組み計画】

<プログラム>

学校法人敬心学園 日本福祉教育専門学校 文部科学省委託事業

「異文化間交流（ダイバーシティ）研修プログラム」

<目標>

様々な異なる文化や生活習慣、背景を持つ人々が働く組織において、お互いの違いを理解し、敬意を持って互いの強みを活かすことができる職場環境を構築できる職員を育成する

<具体的な内容（例）>

- ・やさしい日本語
- ・社会資源・環境をどう活用するか：介護編
- ・対話による異文化理解：介護編

<実施方法>

e ラーニングで基礎的知識の理解と共に課題について考え、集合研修でアクティブラーニングを用いて問題解決方法を学ぶプログラムを提供する。

(メモ欄)